



St. Luke's International University Chapel

聖路加国際大学聖ルカ礼拝堂

〒104-0044 東京都中央区明石町 10-1 TEL 03-5550-2416 (事務室)

E-mail : chapel@luke.ac.jp URL <http://nssk.org/tokyo/church/luke>

ヨハネ福音書 10:11-16(復活節第4主日、24/04/21)

「羊に求められる一つのこと」

チャブレン ヨナ 成成鍾司祭

『羊飼いが読んだ詩 23 篇(A Shepherd Looks at Psalm 23)』という本があります。科学者でもあるフィリップ・ケラー(Phillip Keller)が 8 年間の羊飼いの生活の間、詩 23 篇を黙想して、その結果をまとめたものです。本によれば、羊は我が強くて習慣を変えない保守性が強い動物であるため、土が荒れるほど同じ場所に留まる傾向があるそうです。それで飼い主が移動させないと、その場所の草は根までも無くなり、積まれる羊の汚物によって土が汚染され、結果、羊の命までも危なくなることもあります。それゆえ、羊には必ず導いてあげる羊飼いが必要になります。羊飼いが羊を新しい草原へ導くことによって、羊は健康に育てられ、土も生命力を保つようになるのです。もちろん羊飼いや、狼のような獣から羊を守ることも大事な仕事ですので、訓練された牧羊犬を飼って、羊たちの移動と保護のために働かせます。羊にとって羊飼いは無くてはならない大切な存在なのです。

今日の福音書の中で、キリストは、「私は良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」(11) と語ることによって、私たち人間にとってキリストがどのような存在なのかについて伝えておられます。羊にとって羊飼いが無くてはならない存在であるように、私たちにもキリストは無くてはならない存在であり、さらにキリストは良い羊飼いであるから私たちのために命までも惜しまず捨てるお方である、というお話です。

それでは、羊飼いに喩えられるキリストに対し、羊に喩えられる私たちには、自分の心身の養いと魂の成長のために何が求められているのでしょうか。今日の福音書の前後の教えに準じますと、それは「羊飼いでおられる神様のみ声を聞き分ける。」(16、3-4)、つまり羊飼いについて知る、ということです。誰が真の羊飼いであるのかを知り、何が真の羊飼いのみ声なのかということ、羊自らが識別して自分のものにならなくてはなりません。そうすることによってのみ、真の牧者についていきながら、絶えず私たちの命を狙っている猛獣に象徴される、例えば心配、恐れ、憎しみなどの心理的な猛獣、また中毒、偏見、争いのような社会的な猛獣から保護していただくことも、さらに心身の養いも、魂の成長も、もたらされるようになるのです。

いかがでしょうか。皆さんは真の牧者でおられる神様の声に耳を傾けているのでしょうか。私たちを命へと導く神様の声について聞き分けているのでしょうか。もしかすると私たちを死に迫いやる声に誘惑されているのではないのでしょうか。こういうことが問われますと、神様のみ声を聞くことが何を意味するのかよく分からないと思われる方もいるかもしれませんが、この際、一度じっくりと考えてみてください。深く考えることを黙想という言葉で表現することもあります。それ自体がみ声を識別する一つの通路にもなると思います。いつも良い羊飼いのみ声を聞き分けようとしている皆さんに、神様の恵みが豊かにありますように祈ります。

(※福音書は裏面に掲載されています)

<福音書> ヨハネによる福音書 10章 11~16節

¹¹私わたしは良よい羊ひつじ飼かいである。良よい羊ひつじ飼かいは羊ひつじのたために命いのちを捨すてる。¹²羊ひつじ飼かいでなく、自じ分ぶんの羊ひつじを
持もたない雇やとい人にんは、狼おおかみが来くるのを見みると、羊ひつじを置おき去ざりにしにて逃にげる。―― 狼おおかみは羊ひつじを奪うばい、また
追おち散ちらす。―― ¹³彼かれは雇やとい人にんで、羊ひつじのこころころを心こころにかけていないからである。¹⁴私わたしは良よい羊ひつじ飼かいで
あある。私わたしは自じ分ぶんの羊ひつじを知しっており、羊ひつじも私わたしを知しっている。¹⁵それそれは、父ちちが私わたしを知しっておおられ、私わたしが
父ちちを知しっているのと同おなじである。私わたしは羊ひつじのたために命いのちを捨すてる。¹⁶私わたしには、こかのこ囲こいはいに入いっていないほ
かかの羊ひつじがいる。そその羊ひつじをも導みちびかななければなららない。そその羊ひつじも私わたしのこえきをわ聞きき分わける。ここううして、一ひとつ
の群むれ、一ひとり人ひとの羊ひつじ飼かいとななる。